

自己とコミュニティの関係についての社会学的考察

— G. H. ミードと E. H. エリクソンの再読を通じて —

河井 亨

1. はじめに — 本研究の背景

社会学はその初期の頃から個人と社会の关系到並ならぬ関心を注ぎ続けてきた。そして現在、個人と社会の关系は、個人化と呼ばれる事象によって新たな局面を迎えつつある (Beck 1986=1998、Beck & Beck-Gernsheim 2002、伊藤 2008、川端 2009)。個人化が意味していることの一つは、個々人の人生における変化である。それは、人生を進むにあたって、社会が個々人の人生のコースを準備するという側面が際立っていた時代状況から、個人が自分の人生プランを組織する側面も重要となる時代状況へと推移してきたという変化である。

社会学はこれまで、この人生を進んでいくという経験に関して、心理学との境界を横断しながら研究を発展させてきた。そのような研究の古典的なものとして、G.H. ミードのものが挙げられる。また逆に、心理学においても、E.H. エリクソンのように、社会理論の知見に基づいて理論的な考察を行おうとする試みが少数ながらも見られてきた。社会の中で、生活を営み、人生を進めていくことに関する研究は、心理学と社会学の境界を相互に横断しながら取り組まれてきたのである。

こうした現状に対して本論文では、この人生を進めていくというプロセスについて最も重要な理論を提出した人物であり、かつ今も心理学と社会学の双方にとっての知的源泉となりえている二人の理論家、ミードとエリクソンの個人と社会の关系についての理論に立ち帰って検討し、現在への示唆を引き出すことを目的する。

2. G. H. ミードと E. H. エリクソン：理論形成の過程

ミードは 20 世紀前半に、エリクソンは 20 世紀半ばから後半にかけて、大衆社会や消費社会といった様相を示しつつあったアメリカ社会と向き合っており、それぞれ理論を作りあげた。彼らはともに、人生を進めていくプロセスについて、社会が個々人の人生のコースを準備する側面だけでなく、個人が自分の人生に働きかけて人生を組織化する側面もその射程に収めていた。この点で、ミードとエリクソンの理論の検討から現在に通じる示唆を期待することができる。そこでまず、ミードとエリクソンの個人と社会の关系についての理論本体を検討するに先立って、その理論の形成過程に関わる事柄に目を向ける。

ミードとエリクソンの理論はともに、とかく社会理論というよりは個人レベルの理論、マクロというよりはミクロの理論という印象を抱かれてきた。社会学的自己論の祖 (ミード) ある

いはアイデンティティ理論の産みの親（エリクソン）と呼ばれる中で、こうした理解は強化され続けている。こうした理解からは、個人と社会とを分断して放置するという誤りに至りかねない。ミードとエリクソンは、自己やアイデンティティという概念を他者との関係なしに、コミュニティとの関係なしに、また社会との関係なしに考えていたわけではない。それどころか、個人と社会との関係をこそ問題関心の中心に据えて彼らは理論を作りあげたのである。

そして、このことは、彼らについての史実発掘あるいは伝記的研究からも明らかにされてきている。ミードは、実験学校に関するデューイとの協働だけでなく、激しい社会変動の中で、女性労働運動やハル・ハウスにも関わり、シカゴ・シティ・クラブで調査活動を行ない、さらに教育・移民・労使調停・セツルメントなど多岐にわたって問題解決活動を展開した。そしてそうした活動に取り組む中で、精神・自己・社会の生成理論を作り上げた。他者の態度取得などのミードの社会心理学概念は、20世紀前半の都市シカゴにおける社会状況と向き合う中で形づくられた概念と言える（Joas 1985, Deegan 1988, Cook 1993）。

また、エリクソンの最初の著作は、社会という語が含まれる『子ども期と社会』であった。それは、ライフサイクルの漸成図式を臨床経験や子どもたちの活動の観察によって導出していくだけでなく、スー族とユーロク族についてのフィールドワークに基づいてアメリカ社会について比較社会的に考察している。1950年代以降アメリカでは、官僚主義化が進行し、公私の区別が曖昧となり、個人と社会との関係が不明確となりつつあった。そうした状況を背景に、M. ミードが予測したように、個人と社会を結びつけるアイデンティティの理論を作りあげたエリクソンが公共的知識人として脚光を浴びるようになっていった（Mead 1955）。エリクソンのアイデンティティ理論は、20世紀半ばから後半にかけてのアメリカ社会に共鳴していたのである（Friedman 1999=2003）。

ミードとエリクソンにおける個人と社会の関係についての理論は、個人と社会を分断するのではなく、個人と社会を直結させようとするのでもない。彼らは、問題解決に向かって、諸個人が相互行為するという社会的な媒介過程に目を向けていた。そして3節で見ると、彼らはともに個人と社会の間をつなぐところに自己とコミュニティという概念を重要なものとして位置づけていたのである。

ミードとエリクソンが、個人と社会の関係についての理論を作りあげたことは、以上のような伝記的事実からだけでなく、彼らの理論のその後の発展や評価からも伺い知ることができる。例えば、ミードの理論を継承しつつH. ブルーマーは、集合行動や社会運動における個々人の解釈がどう作用するかを問題にしたし、A. ストラウスは社会心理学的考察と社会組織的考察の統合を目指し、パースペクティブの多元性に注意を向けながら病院組織の調査研究を大きく進めていった。こうした流れから、現在質的研究と呼称される研究が多数生み出されるに至っている（船津・宝月編 1995, 船津編 1997）。これらの個人と社会の関係に照準を当てた研究の発展すべてが、ミードの理論にすでに示されていたなどというわけではない。しかし、ミードの理論なくしてこうした発展はありえなかっただろう。ミードの理論は疑いなくこうした発展大きな原動力であった。

エリクソンの理論もまた、個人の発達と社会的・歴史的コンテクストの相互作用を扱ったものという評価を得てきた（Weigert, Teitge & Teitge 1986）。心理学理論におけるアイデンティ

ティ理論の多面的な発展においては、アウトカムや達成としてのアイデンティティの測定を精緻化するも、社会的・歴史的コンテクストとの関連がぼやける傾向があった。しかし、そうした発展を経て今日、エリクソンが個人と社会との関連を重視したことが再評価されるに至っている (Côté & Levine 2002, 溝上 2008)。エリクソンの図式を普遍的に適用可能な理論的スキーマとして用いるのではなく、歴史・社会・文化との文脈との関連を問うていくことでエリクソンの理論の力が十分に発揮されるのである (Weigert & Gecas 2005)。

3. ミードとエリクソンの理論：自己とコミュニティ

前節では、ミードとエリクソンの理論を形づくる過程に関わることから、彼らの理論が個人と社会の関係についての理論として理解できることを確認してきた。続けて本節では、ミードとエリクソンの理論本体の内容についての検討を行う。

3.1. ミードの社会心理学理論

ミードの理論のポイントの一つは、精神や自己が相互行為過程において形成されるということである。ミードは社会心理学を定礎する中でこの洞察を導き出した。ミードは、都市シカゴの社会問題を考慮に入れつつ、心身二元論を批判し、社会心理学理論を構築した。それは、社会的なアクション・リサーチという初期シカゴ学派に広く共有された考えと響きあいながら、「考えるという営みを、行為の現場にとりもどす」(徳川 2006: 193)、すなわち行為者を思考する再帰的エージェントとして措定しようとする理論であった¹⁾。ミードの社会心理学理論の構築は、行動についてのジェイムズの説明、デューイの機能主義心理学を経て、相互行為論的社会心理学として構築されるに至るという道をとる。以下、それを追っていく。

ジェイムズ (1890) は、行動を説明するのに、対象との関係に目を向けた。身体と精神を互いに分離した独立の実体とする心身二元論とは異なる立場に彼は立つ。ジェイムズは、心理現象を、環境との関連における有機体の生命現象と捉える。すなわち、有機体の行動と習慣はその環境との関係性によって決まると考えたのである。言い換えれば、有機体の行動という反応は環境における刺激との関係抜きに考えることはできないという知見に達したのである。

しかし、ジェイムズは、環境と行動、あるいは刺激と反応を分断したまま対置してしまっている。さらに、刺激と反応の区別と対象と有機体の区別を重ねあわせ、働きかける側と働きかけられる側を固定してしまっている。結果、刺激は対象の側に、反応は有機体の側に固定され、何が刺激となるかについてあるいは何を刺激とするかについて、非選択的な所与としてしまっている。

ところが、ミードが犬の例を引いて言うように、身ぶりの会話では、一方が他方に一方的に働きかけ続けるなどということはなく、ある場面では一方が働きかけるが、それと連続した別の場面では他方が働きかけるというように双方向でやりとりするのである。

このように、刺激と反応が分断され、一方向的に固定されているとするような理解を批判し、刺激と反応をお互いの位置を代え相互的かつ選択的にやりとりがなされうると捉えたのがデューイの機能主義心理学である (Dewey 1896)。そこでは、対象は働きかけに先立って単独

で存在するのではなく、協調作業を通じて構築される。刺激と反応は、有機的な全体をなす円環であり、協調作業の状況において、相互的に構成されるのである。そしてデューイは、この刺激も反応もいまだ確定していない、すなわち不確実な状況を問題状況と捉える。問題を解決する探究の過程で、刺激と反応の円環が働いて、行為を徐々に形づくる。また問題解決の過程で新たな経験をつみかさね、その経験に媒介されて発達が起こる。

ミードは、探究とは問題解決の活動であるとするデューイと見解を共にする。ミードの社会心理学はデューイの機能主義心理学を発展させたものと言える (Cook 1993)。この時点でのミードにとって、問題状況は、行為の停止であり、行為を再び進行させるための思考の始まりであった。しかし、ここに行為の停止と進行の二分法という難点がある。これを解消するべくミードは、生理学的心理学のカウンターパートとしての社会心理学というかたちで、身ぶりに着目し、複数の行為、相互行為、態度取得、有意味シンボルといった概念を次々考察していくのである。

ミードは、状況における行為の一局面として反応を呼び起こす身ぶりに着目した。身ぶりは、社会的行為の最初に現れる局面である。社会的行為とは、ある個人の行為が他の個人の反応に対する刺激として働く行為である。したがって、こうした社会的行為において身ぶりの機能は、変化する刺激に対して反応を変化させるという相互の調整にある (Mead 1964:123-125, Mead 1934: 46)。このように身ぶりは、ある個人の他の個人への関係において重要な役割を持つ。ここからミードは、個人間の関係、そして諸行為が対立したり連結したりするような関係について考察していく。すなわち、互いに異なる行為があつて、ある行為が他の行為に応え、他の個人の行為を呼び起こしていくような協調作業の状況について考察していく。こうしてミードは、社会心理学において「社会的刺激と社会的反応の理論、および、これら諸刺激と諸反応とによってつくられる社会的状況についての理論」(Mead 1964: 101: 以下、全て訳文は筆者訳)を發展する必要を指摘する。

社会的行為と、その最初に現れる局面としての身ぶりと、それらにかかわる刺激と反応と、その相互調整とが行き交う中でそれぞれの社会的行為は進行する。刺激の位置を占める側と反応の位置を占める側とは位置を代え、相互にまた選択的にやりとりしながら、社会的行為が進行する。社会的行為は、身ぶり、そして行為をやりとりするなかで進行していく。そこで行為者は、他の個人の行為に働きかけるだけでなく、自らの行為を調整している。ある個人の行為が、他の個人にとって一定の行為への刺激となってその個人が反応するというだけでなく、その個人の反応に先立ってあるいはそれと同時に刺激の位置にある個人自身に対する刺激となってその個人に反作用を引き起こすというような社会的な媒介による他者との関係性の状況をミードは相互行為と捉えた。ミードの社会心理学は、この相互行為状況を捉えようとするという点で「相互行為論的社会心理学」(徳川 2006: 173)と呼びうる。

この相互行為という状況があるがゆえに、身ぶりが有意味なものとなりうる。意味とは、行為が他の個人に対して有する価値である。有意味になるということは、自分自身にとっただけでなく、同じ状況で意味が指示されるところの他者にとっても意味が存在する事態である。身ぶりやシンボルは、他者に反応を引き起こすだけでなく、他者に反応を引き起こすことが予期されることからひるがえって、自分自身に再び帰って反作用するのである。このとき、身ぶり

やシンボルは有意味なものとなる。こうして人々は、有意味な身ぶりやシンボルが相互行為の状況で媒体とし、行為や思考そして相互行為をするのである (Mead 1964: 240-247)。

相互行為の状況では、すでになされた行為に反応するだけでなく、これから呼び起こされるだろう行為とやりとりすることになる。身ぶりや行為に関して、予期する／される、指示する／されるといった交渉をしながら、諸行為が形づくられる。この起こりうる行為をめぐるやりとりの領域が態度の領域である。ミードは、態度の領域を、進行する行為があらかじめ組織化されたり、停止した行為が現実化されずに進行したりする領域と考える。この態度の概念によって、諸行為の関係において、行為の停止／進行という二分法を乗り越えることが可能になる (加藤 2004)。

相互行為の状況で、他者のパースペクティブに入り込み、そこを経由して自らの位置に再び帰るといふ再帰現象を伴って他者の態度が取得される。そして他者に働きかけるだけでなく自らにも働きかける有意味シンボルが行き交う。この態度取得も有意味シンボルも確定的ではなく、身ぶり、行為、態度と関連しながら状況の中で確定されていくのである。

また、諸個人による協調作業の相互行為の状況において、すなわち問題解決に向けた状況において、他者の態度に対する反応と、自分が想定する他者の態度によって自分の予期的行為を方向づけるという省察＝再帰の領域が思考の領域である。思考の過程は独白・単独の過程ではなく、こうしたやりとりに埋め込まれた社会的過程であり、相互行為の状況なしに進行することはできない。この意味で、「思考のメカニズムは、思考が社会的やりとりにおいて用いられるシンボルを用いるかぎり、内的会話にほかならないものとなる」(Mead 1964: 146)。こうして相互行為の状況において、行為し、思考し、お互いに態度を取得しあう再帰的エージェントとしての行為者たちというミードの相互行為論的社会心理学の中核部分が姿を見せる。

ミードは、この相互行為論的社会心理学の展開という文脈で子どもの発達現象の中に思考と自己の発生を考察していく。よく知られているように、ミードは、特定の重要な他者の役割を取得していくプレイ段階と、一般化された他者との関係で役割を取得していくゲーム段階という子どもの発達に目を向けた。重要な他者とは、子どもに働きかけつつ自分自身にも働きかけている他者のことである。その他者のパースペクティブに入り込み、その態度を取得することで、子どもは、他者に働きかけると同時に自分自身にも働きかける有意味シンボルを確定しながら用いていく。これに対して、他者に働きかけると同時に自分自身にも働きかける行為者たちからなるコミュニティの中で、ルールや定められた手続きのように組織化されたパースペクティブに入り込み自らを位置づけることで一般化された他者の態度を取得することができる。それゆえ、一般化された他者の態度とはコミュニティ全体の組織化された態度である。この態度を取得することで、自らの位置を占める、すなわち役割を得るのである。そしてこれによって、展開している相互行為の組織化に参加するのである。

ミードは、子どもの発達において自己意識に到達するには、この二つの段階が不可欠だと述べる。この二つの段階があってはじめて、社会的諸行為が進行し相互行為が展開するような社会的過程における自己の発生を考えることができるのである。自己という経験は、その個人にとって自分自身が対象となる経験である。したがって、自らの経験において自己となるのは、他者のパースペクティブに入り込んで、自分自身の側の態度が呼び起こすであろう他者の態度

を取得しつつ、自分自身に立ち帰ることによってである (Mead 1964: 283-284)。そしてそこでの社会的やりとりで有意義シンボルを用いることにともなう内的会話=対話として思考が現われている。

ミードの社会心理学の眼目は、自己を再帰の営みとして、思考を対話としてその発生の視角から捉えなおすところにある (加藤 2004, 徳川 2006)。そして社会心理学からの発展として自己の発生論を越えていく論点が、組織化された自己を形づくるのがコミュニティとの関係であるという論点なのである。

組織化された自己を形づくっているのは、その個人が属するコミュニティに共通な態度群によってである。われわれはこうした共通の態度をもち、共通の反応を構成するということなしに、何らかの権利を有するといったコミュニティ生活を営むことはできない。そしてこの共通の反応によって、個人は、コミュニティにとっての価値に向けられたコミュニティの全ての成員の認められた態度を与えられる。こうしてその個人は、コミュニティ生活の中で、コミュニティの全ての成員の組織化された反応を表わす、一般化された他者の位置に自らを置き、自分自身に立ち帰る。この営みがあって行為者は再帰的エージェントとなりうる。「自己であるためには、人はコミュニティの成員であらねばならない」(Mead 1934: 162)。

われわれ自身の自己は他者たちの諸自己が存在し、そのようなものとしてわれわれの経験の中に入り込む限りでのみ、われわれの諸自己が存在しわれわれの経験に入り込むからである。個人は、その人の社会的グループの他の成員たちの諸自己との関係においてのみ自己を有する (Mead 1934: 164)。

他の諸自己との明確な諸関係においてのみ、諸自己は存在しうるのである。自己は、他者との関係、そしてコミュニティとの関係なくしては存在しない。こうして、行為者を思考する再帰的エージェントと捉えるミードの相互行為論的社会心理学において、自己とコミュニティの関係は中心的な位置を占めているのである。

3.2. エリクソンのアイデンティティ理論

ミードが社会心理学理論において子どもの発達に関心を向けたのに対し、エリクソンは子どもの発達のみならず、青年期・成人期・老年期にわたるライフサイクルへと関心を向けた。ミードの相互行為論的社会心理学における中核をなすのは、他者の態度取得を通じての自己の発生であった。エリクソンの理論の中心となるのはアイデンティティ形成である。

アイデンティティ形成は、乳児と親との微笑の交換のような相互調整に始まり、成人期以降も親密性や世代継承といったことをめぐって生涯続いていくプロセスである (Erikson 1950)。アイデンティティ形成にとって、決定的に重要な時期は、子ども期と成人期の間に位置し、学校生活から労働生活への移行の時期にあたる青年期である。青年期に問題となるのは、他者への見え方を意識しつつ自己定義することであり、これまで習得してきた技能や役割を現在の時代状況に関連づけることであり、日常生活を将来につなげていくことである。職業の選択や友人関係・恋愛関係でのイベントが葛藤をもたらしながらも成長の契機として彼らを待ち受けて

いる。

エリクソンは、発達のメカニズムとして取り入れと同一化とアイデンティティ形成とを区別する (Erikson 1959: 121-122, 1968: 159-160)。まず、取り入れは、世話をしてくれる親と世話をされる子どもとの満足な相互性に基づいている。次に、同一化は、家族のなかでの役割群との満足な相互作用に基づいている。ここに子どもの側にいろいろと試してみる余地が少し与えられることになる。そして舞台が社会へと移ることで、コミュニティとの関係が問題になる。ここでアイデンティティ形成は、これまでの役割と同一化を選択的に拒否したり、相互に同化したりして、自分の生活史における斉一性と連続性を社会的にすなわち他者との関係において新しい形態にまとめあげるといった個人々々人々にとっての選択的な人生課題になる。

それゆえに青年期におけるアイデンティティ形成は、その個人が属するコミュニティとの相互承認関係を築けるかどうかにかかってくる。コミュニティは、個人が承認を求めるときにおいて、自らの存在が承認されたと感じる。それゆえに、個人がコミュニティの承認を求めているかどうか不確定な場合、不信感を示し、さらにはお互いがお互いを拒絶しあう互酬的否定の関係に至ったりもする (Erikson 1968: 219)。

とはいえ、「コミュニティがその個人を認定するやり方は、多かれ少なかれ、その個人が自分を他者と同一化するやり方とうまく適合する」(Erikson 1968: 160) のである。そこでエリクソンは、互酬的否定を避けるためにも、コミュニティとの相互承認関係のヴィジョンを描くことを目指す。アイデンティティについての考えがまとまってきた 1968 年の著作『アイデンティティ』ではその本全体に通じる問題関心を、個人の核心およびその個人のコミュニティの文化の核心に位置づけられたプロセス、すなわち個人とコミュニティの両者それぞれのアイデンティティのアイデンティティを確立するプロセスにあるとしている。エリクソンは、個人-コミュニティ、そして人生-歴史のダイナミックな相互連関を捉えようとしたのである。

アイデンティティについて考察する際、個人の成長とコミュニティの変化とを切り離すことはできないし、また…、個人の人生におけるアイデンティティの危機と、歴史の発展における現代の危機とを切り離すこともできない。なぜなら、これらはともに互いに他を定義しあうのを助け、真に相互関連的だからである。事実、アイデンティティの形成はその原型としての重要性をもっているような相互作用、すなわち心理的なものと社会的なもの、発達のなものとの歴史のものととの間のすべての相互作用の全体は、一種の心理社会的相対性=関連性としてのみ概念化されうるものなのである (Erikson 1968: 23)。

このような相対性=関連性ゆえに、コミュニティの承認は、青年たちのアイデンティティ形成にとって不可欠な支援となるのである。そして、アイデンティティ形成は、青年たちの成長という問題であるだけでなく、世代と社会の側の問題でもある。すなわち、「アイデンティティの危機」は新しい世代の青年にとっての危機であるだけでなく、次世代に力強いヴィジョンを示せず、指導力を発揮できない古い世代の責任という問題になりうるのである。また、社会とコミュニティが青年たちの成長を支持するだけでなく、青年たちのアイデンティティ形成においてコミュニティが承認され、社会が刷新されていく。それゆえ青年たちのアイデンティ

ティ形成から社会はどのように活力を得ることができるかという問題が提起されうる (Erikson 1968)。

このように、エリクソンは個人の自我プロセスとコミュニティとの関係を考察した。相互行為、そしてコミュニティの関係において個人の自己が生じるとしたミードの相互行為論的社会的心理学に対して、コミュニティとの相互承認関係を理論化することによってエリクソンのアイデンティティ理論は一步踏み出したと評価できる。すなわち、コミュニティとの関係において互酬的否定に陥らないためにもコミュニティからの承認が不可欠であると同時に、アイデンティティ形成していく個人はコミュニティから承認を受け取るばかりでなく、コミュニティに承認を与えていく。このコミュニティに承認を与えていくという意味で、相互承認関係なのであり、この点が前進である。さらに、エリクソンのアイデンティティ理論においては、この相互承認による相互活性化の関係が、社会に活力をもたらしていくのである。

こうして、エリクソンのアイデンティティ理論において、社会の側から個人側へ働きかける通路だけでなく、個人側から社会の側へ働きかける通路が理論化されたと言える。そしてこれによって、世代・コミュニティ・制度・社会それぞれの集合的責任を問うていく基盤がつけられた。こうした達成は確かに重要なものであったが、コミュニティとの相互承認関係を理論化するというビジョンを重視する方向性ゆえに、すでに互酬的否定に陥っている場合どうするのかといった問題や互酬的否定を回避しつつどのように相互承認関係を構築していくのかといった実践的問題が積み残されている。

このことと関わって、エリクソンの自我アイデンティティ形成の理論は、生活が多様化し流動化するという時代状況 — ポストモダンと呼称されるような時代状況 — にあっては通用しないと批判されることになる (Gergen 1991, Lifton 1993)²⁾。こうした批判がなされるのも、自己とコミュニティの関係において、個人側から社会の側へ働きかけていく集合的プロセスの側面のみ理論化し、そこでの個人の実践の側面が十分に理論化されていないことに起因するのである。

3.3. ミードの実践の社会理論

ここでわれわれは、エリクソンと同じく、自己とコミュニティの関係を理論化していたミードに再び立ち帰って、それも先ほどのミードの社会心理学理論ではなく、そこから展開される実践の社会理論に立ち帰ることで、考察を先に進めることができる。エリクソンがボストンにおける児童精神分析家として、あるいはインディアン居留地区でのフィールドワーカーとして実践を重んじてきたのと同様、ミードも、教育問題や労働争議のような実践的問題に入り込み、参加し、その中で理論化を進めた。さらに、前節で見たようにエリクソンの理論では、実践に関わる諸概念が空白であり、そのため実践的問題が積み残されたのに対し、ミードの実践の社会理論では、実践に関わる諸概念が措定されているのである。

実際、ミードが入り込んで参加していた実践の状況は、お互いが要求を突きつけあい、お互いの立場を一面化して論難しあうような互酬的否定に陥りかねない状況であった。そしてこうした状況に入り込んでいくミードの要石は、他者の態度取得と再帰的な自己吟味であった (徳川 2006: 219)。それは、実践の状況において機能価値を創出する手立てであった。

そこでは、個々人が、問題を自分の生活にかかわるものとして領有して、その機能連関を見出すこと、すなわち自分のしていることが何をなそうとしているのか、その関連や影響や射程や含意に目を向けることが重要となる。のみならず、この機能連関についての知識と理解でもって、実践を同じくする人々と、自分たちがしていることがどのような文脈でどのような意味合いを有するのか、また自分たちの実践が社会のどのような位置にあって、いかなる働きをしているのかという実践についての再帰的な自己吟味を行なうこと、そしてこれらを共有していくことが重要となる。そして、こうした共有の相互行為に参加すること、また自分たちとは立場を異にする人々の相互行為に参加することといった参加による／としての学習が重要となる。これらをともなって探究としての問題解決活動を進めていくことが重要となる。

ここから、科学すなわち知識を扱う営みにとっては、相互行為の組織化や機能連関のありようやその条件について吟味し追究するという要請が現れる。また、実践の状況に参加する個々人にとっては、その実践に関わる他者の態度取得とその実践の再帰的な自己吟味とそれらを通じての探究によって、社会的な媒介を通じての相互行為の発展の契機を確保し促進すること、そしてそこから自分が属するコミュニティ全体との協調作業における自らの社会生活の意味合いを知るという実践的な課題に取り組むことという要請が現れる (cf. Mead 1964: 264, 368)。

こうしてミードの社会理論に立ち帰ることで、エリクソンが理論化したような個々人の側から社会の側へ働きかける通路について、実践面の理論家を補うことができる。すなわち、再帰的エージェントとしての個々人が、その実践にかかわる他者の役割取得とその実践の再帰的な自己吟味とそれらを通じての探究によって実践的な課題に取り組みながら責任をもって協調作業に、したがってコミュニティとの関係に参加して学習していくのである。

3. 1. 節と3. 2. 節で、コミュニティの成員として思考する再帰的エージェントとしての行為者、また他者との相互関係およびコミュニティとの相互関係においてアイデンティティ形成していく個人を見出すことができた。人々は、コミュニティあるいは相互行為の状況における他者との関係性を通じて、自己に再帰しつつ、思考し、行為する。ここに、再帰の営みにおける自己の変容可能性を見出すことができる。これに加えて本節での実践面の理論化から、コミュニティの変容可能性を見出すことができる。すなわち、態度取得・役割取得を経て行為者は、相互行為の状況において、他者に向けて、またコミュニティに向けて働きかけるあるいは働き返す。このことが、天才による創造からほとんど気づかれない小さな何事かまでの変化をコミュニティの状況にもたらしうる。そしてそれは、その行為者がコミュニティの成員であるかぎりにおいてである (Mead 1934: 178-180, 200-5)。

4. 社会生活における自己とコミュニティ

ここで以上の検討から現在への示唆を引き出すために、人生を進めていくプロセスについての現在の議論との接合を図らねばならない。冒頭で論じたとおり、人生を進めていくにあたって、個々人は、個人化状況に置かれている。そこで個々人は、生じてくる出来事に対してなされるがままに受動的であるのではなく、打てる手を模索し、交渉し、思考し、試行錯誤する再帰的エージェントである。そしてそれは、既有知識、キャリア、ネットワーク、人生プラン、

自己物語といったリソースを用いて、過去をふりかえり、将来を構想し、現状を分析するという時間的な流れの中での再帰的な営みにおいて自己を選択的に定義することを通じてである (Giddens 1991 ; 浅野 2001 ; 片桐 2006)。このように、多かれ少なかれ、またうまくいこうが失敗しようが、そして時と場所によって多様だが、社会生活の中で個々人は自己に働きかけながら、人生を進めているのである。このような社会的に埋め込まれたリソースに依拠して行なう選択的な自己定義という働きかけの対象となるという点で、自己は社会的な媒介過程において形成されている (船津編 1997)。

個人が自己に働きかける再帰的エージェントであるということは、自分の思いのままに人生を進めることができるということの意味しない。個々人は再帰的エージェントとして自己に働きかけ、それを経て人生を進めていくことができるが、他方でそれは社会的な媒介過程においてであり、それゆえ社会的な制約を受ける可能性がある。

まず、個々人が働きかける自己は、真空状態で形成されるのではなく、コミュニティ生活のなかで構築される。構築される自己は、再帰的な営みにおけるリソースとなるが、他者との関係性から分離されているのではなく、そこに埋め込まれている。そして、個人がこうした再帰的な営みを通じて何事かを行おうとするところでも、真空状態に向けてではなく、他者との関係性そしてコミュニティに向けて方向づけられる。コミュニティは、個人が行為を形成するところでの枠組みの役割を担うのである。さらに、社会生活においては、自己とコミュニティとの関係や個人と社会との関係のような社会的な媒介過程を通じて交渉・実行していくことで、様々な選択肢の中で人生を進め、学校から社会へというようにコミュニティを移行することもあれば、新たにコミュニティをつくるということもあるのである。これまでその個人がどのような人生のコースを辿ってきたか (リソース) あるいはこれからどのような人生を進んでいくか (枠組みと選択肢) に対して、社会的な制約が作用する。

自己とコミュニティとその関係は、人生を進めていくという時にその拠って立つところの社会的な媒介過程にこのように根ざしているという認識がなされている。個人化によって個人と社会の関係が新しい局面をむかえる現在、本研究ではミードとエリクソンに立ち帰ることで検討を進めてきた。ミードの相互行為論的社会心理学、エリクソンのアイデンティティ理論、ミードの実践的社会理論とたどるなかで、その理論における自己とコミュニティの関係性を明らかにしてきた。この検討によって、個人と社会の関係において、自己とコミュニティとその関係が人生を進めていくプロセスでさらに重要な位置を占めることが見出された。それは、自己とコミュニティの関係を通じて個人と社会を双方向に結ぶ通路である。すなわちコミュニティ生活・相互行為の状況における自己の発生・構築、自己とコミュニティの相互承認関係を通じてのコミュニティからの支持、コミュニティそして世代と社会の集合的責任、個々人がコミュニティを承認していく集合的プロセスが見出された。そして実践の相互行為状況において思考する再帰的エージェントとしての行為者、その自己の変容可能性、さらにその行為者の属するコミュニティの変容可能性が見出された。現在、個人と社会の関係において、このような自己とコミュニティによる双方向の通路とそれらの関係性を考慮すること、これがミードとエリクソンの理論からの現在への示唆である。

5. 終わりに

以上の理論的検討を踏まえて、具体的な諸実践における自己とコミュニティの関係に取り組むことで、実践の状況に入り込んで参加していくような問題解決に関わる経験的研究に向かうことができる。まず、近年発展してきているコミュニティ理論 (e.g. Delanty 2009) の成果を参照していくことが今後の課題の一つである。また、経験的研究において、その実践の状況における自己とコミュニティとその関係を検討することで、個人化という社会的な媒介過程についての考察に接続することも課題となる。例えば、人生を進めていくプロセスにおいて重要な岐路にある現在の日本の大学生の日々取り組んでいる活動に関して、そのコミュニティとそこでの自己との関係について探究するといった研究課題が考えられる。個人と社会の関係だけでなく、実践状況における自己とコミュニティの関係を考察することが、理論的研究と経験的研究とをともにますます豊かで厚みのあるものとしていこう。

注

- 1) 本節では、当時の心理学の諸学説を位置づけたうえでミードの社会心理学の理論構築を精密に捉えた徳川 (2006) 第二部「ミードとアメリカ社会学・心理学——社会心理学の生誕」に依拠してミードの社会心理学理論を整理する。
- 2) このことについて次の点を補足しておきたい。エリクソンにとってアイデンティティの危機の解消は規範的な要請として理解される側面がある。それは、時代状況と向き合い、ヴィジョンをつくりだそうとしたことの帰結の一つであったと考えられる。確かに、アイデンティティ理論についての歪曲した理解に基づいて若者をバッシングするなどその規範化による負の側面が見出されるし、エリクソンが深く洞察した時代状況と現代は様相を異にしているといった点で、エリクソンのアイデンティティ理論に無反省に依拠することはできない。しかし、そこからアイデンティティ理論を放棄するということは極端に走りすぎているように思われる。アイデンティティ理論を放棄するよりもそれを再構成しながら、エリクソンが十分に発展させなかった論点について、エリクソンのように社会に目を向けながら、エリクソンのリソースを掘り起こすことが重要であると考えられる (van Hoof 1999, Schwartz 2001, Côté & Levine 2002)

文献

- 浅野智彦, 2001, 『自己への物語論的接近——家族療法から社会学へ』 勁草書房.
- Beck, U. 1986, *Risikogesellschaft Auf den Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp Verlag (=1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代への道』法政大学出版会).
- Beck, U. and E. Beck-Gernsheim, 2002, *Individualization: Institutional Individualism and its Social and Political Consequences*, London: SAGE Publications.
- Cook, G.A., 1993, *George Herbert Mead: The Making of a Social Pragmatist*, Urbana: University of Illinois Press.
- Côté, J.E., & Levine, C. G., 2002, *Identity Formation, Agency, and Culture: A Social Psychological Synthesis*, Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- Deegan, M.J. 1988, *Jane Addams and the Men of Chicago School, 1892-1918*, New Brunswick: Transaction Books.
- Delanty, G. 2009, *Community*, (2nd ed.), London: Routledge.
- Dewey, J. 1896, "The Reflex Arc Concept in Psychology," *The Psychological Review*, 3, pp.357-370.
- Erikson, E.H., 1950, *Childhood and Society*, (2nd ed.), New York: Norton.

- , 1959, *Identity and the life Cycle*, New York: Norton.
- , 1968, *Identity: Youth and Crisis*, New York: Norton.
- Friedman, L.J., 1999, *Identity's Architect: A Biography of Erik H. Erikson*, Scribner. (= 2003, やまだようこ・西平直監訳『エリクソンの人生—アイデンティティの探求者—』上・下, 新曜社).
- Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Stanford: Stanford University Press.
- 船津衛・宝月誠編, 1995, 『シンボリック相互作用論の世界』 恒星社厚生閣.
- 船津衛編, 1997, 『G・H・ミードの世界』 恒星社厚生閣.
- Gergen, K.J., 1991, *The Saturated Self*, New York: Basic Books.
- 伊藤美登里, 2008, 「U. ベックの個人化論——再帰的近代における個人と社会」『社会学評論』 59(2), pp.316-330.
- James, W. 1890, *The Principles of Psychology*, vol. I and II, New York: Henry Holt.
- Joas, H., 1985, Meyer, R., trans., *G. H. Mead: A Contemporary Re-examination of his Thought*, Cambridge, UK: Polity Press.
- 片桐雅隆, 2006, 『認知社会学の構想——カテゴリー・自己・社会』 世界思想社.
- 加藤一己, 2004, 「G・H・ミードの思想形成過程」宝月誠・吉原直樹編『初期シカゴ学派の世界——思想・モノグラフ・社会的背景』, pp.53-79.
- 川端健嗣, 2009, 「自由と統制の個人化論」『ソシオロギス』 33, pp.1-13.
- Lifton, R.J., 1993, *The Protean Self: Human Resilience in an Age of Fragmentation*, New York: Basic Books.
- Mead, G.H., 1934, *Mind, Self, and Society*, C.W. Morris ed. Chicago: The University of Chicago Press.
- , 1964, *Selected Writings of George Herbert Mead*, J. Reck ed. Chicago: The University of Chicago Press.
- Mead, M., 1955, "The Scholar's Scratch Pad," *American Scholar*, 24, pp.378-382.
- 溝上慎一, 2008, 『自己形成の心理学——他者の森を駆け抜けて自己になる』 世界思想社.
- Schwartz, S. J., 2001, "The Evolution of Eriksonian and Neo-Eriksonian Identity Theory and Research: A Review and Integration," *Identity: an International Journal of Theory and Research*, 1, pp.7-58.
- 徳川直人, 2006, 『G・H・ミードの社会理論——再帰的な市民実践に向けて』 東北大学出版会.
- van Hoof, A., 1999, "The Identity Status Field Re-Reviewed: An Update of Unresolved and Neglected Issues with a View on some Alternative Approaches," *Developmental Review*, 19, pp.497-556
- Weigert, A. J., & Gecas, V., 2005, "Symbolic Interactionist Reflections on Erikson, Identity, and Postmodernism," *Identity: an International Journal of Theory and Research*, 5(2), pp.161-174.
- Weigert, A. J., Teitge, J. S., & Teitge, D. W., 1986, *Society and Identity: Toward a Sociological Psychology*, Cambridge, NY: Cambridge University Press.

(高等教育開発論講座 博士後期課程 1 回生)

(受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日)

Sociological Considerations on the Relationship between
the Self and Community:
Reviewing the Theories of G. H. Mead and E. H. Erikson

KAWAI Toru

This paper attempts to clarify the lives of people that socially were becoming individualized by reviewing theories of G. H. Mead and E. H. Erikson of the relationship between individual and society. They were organizing their own lives rather than adapting them to their life course provided by society. The theories of Mead and Erikson, though they had been proposed in the early 20th century, were still effective to consider their own lives to be organized. Because of this, it was valuable to review and consider these theories. As a result, I found that the relationship between self and community could be located in the relationship between individual and society by reviewing Mead's interactional social psychology, Erikson's identity theory, and Mead's social theory of practice. In this mediation, individuals' selves were constructed in the communities and those communities consisting of society were also reconstructed by people's involvement.